

【GDN-Japan Newsletter】

<http://www.gdn-japan.jbic.go.jp/japanese/index.html>

2008/06/18 1号

目次:

編集局よりのご挨拶

GDNとは?: GDN創設の経緯、構造

GDNと私: 林 薫 文教大学国際学部教授 (GDN創設メンバー)

その他: メンバー機関からの News 掲載 (国際開発学会 第19回全国大会  
(2008年度・広島修道大学))

編集局あとがき

---

編集局よりのご挨拶

平素 GDN-Japan 活動に御理解、御協力頂きましてありがとうございます。

GDN-Japan は、

「GDNの日本地域ネットワークとして国際開発・国際協力に関する日本を含む各国の経験・知見を活用しつつ、開発途上国の政策形成能力強化を促進するとともに、調査・研究活動を通じ開発援助政策の向上に寄与し、もって開発途上国の発展に寄与する」

を目的として活動しております。ただ、事務局としてまだまだ GDN という資産を活かしきれていないという想いがありまして、今回のニュースレター(メルマガ)の発刊に至っております。分かり易さを旨としておりますが、皆様より御意見頂きまして、より良くしていきたいと思っております。

記念すべき第1号の内容は以下の通りです。

まずは「GDNとは?」。これは「GDNとはどういった組織なのか」といったところの解説を目的としております。次に「GDNと私」、これは GDN-Japan メンバーに GDN との係りを語って頂くもので、第一回目は、創設時より GDN に携わっておられる林薫文教大学教授に御登場お願い致しました。最後にメンバーからのイベント、ニュース等を扱う「その他」という構成です。

当面は以上のような構成で隔月を目処に発信して参りたいと考えております。

では、「GDNとは?」から。

---

GDNとは?: GDN創設の経緯、構造

### 【GDN 創設の経緯】

GDN は開発途上国及び先進国の研究者や政策実務者の開発に係る知識を共有し、調査研究活動と実務的活動のギャップを埋めることを目的に、世界銀行のイニシアティブで 1999 年に設立された開発途上国及び先進国の政策・研究機関及び研究者のネットワークです。

GDN の活動への参画を通じて、開発途上国の研究者・研究機関の調査研究・政策形成能力が強化されることで、調査研究内容が開発途上国の政策形成等に、より一層役立つこと、ひいては開発途上国・地域の開発に寄与することが期待されています。

現在 GDN の地域ネットワークが 11 地域にありますが、その一つである日本ネットワーク(GDN-Japan)のハブ機関としての役割を、国際協力銀行開発金融研究所が担っています。GDN-Japan 設立の背景については、国際協力銀行 開発金融研究所報

(<http://www.jbic.go.jp/japanese/research/report/review/index.php>)

第 6 号「特集:Global Development Network」及び第 24 号「開発における知識ネットワークと国際社会」をご参照下さい。

### 【GDN の構造】

GDN は地域ネットワーク及び国際機関等より推薦された研究者等からなる理事会及び実際の GDN の活動を執行する事務局、GDN の活動を各地域よりサポートする地域ネットワークより構成されております。今年 2 月の国際機関化により理事会とは別に総会が設置されますが、これを踏まえ、今後どのような運用体制となるかが注目されるところです。

なお現在理事会は、エルネスト・セデージョ エール大学グローバリゼーション研究所所長(元メキシコ大統領)を理事長とし、他 18 名の理事にて構成、日本からは、近藤正規 国際基督教大学上級准教授が参画しています。

事務局については GDN 設立当初から約 7 年間に渡り務めたリン・スクワイア氏に替わり、2007 年 8 月より元世界銀行アフリカ担当副総裁のゴビン・ナンカーニ氏が事務局長に着任されています。

GDN の第 1 回会合 (Global Development Conference) がドイツのボンで開催されたのは 1999 年の 12 月でしたので、もう「前世紀」の話になります。以来、今年の第 9 回大会まですべての会合に参加してきましたが、この間に同時テロのような大きな世界的事件だけではなく、静かな構造変化が進行していて、それが GDN のあり方にも微妙に影を投げかけています。

日本にとって GDN の前史は 1995 年 12 月に開催された「日本・世銀リサーチフェア」に始まります。日本と世銀の研究者・実務者の交流を目指したもので、GDN 同様、知識の共有が中心課題になり、ワークショップやポスターセッションなど後の GDN 会合で採用された方法が行われていました。1995 年といえば、Windows95 が発売された年で、インターネットが爆発的に普及し始める前夜でした。リサーチフェアは研究、実務機関の組織的交流という形をとっており、世銀や海外経済協力基金(当時)が情報の「ハブ」になるというビジネスモデルがベースになっていました。

1999 年に正式発足した GDN も基本的にこのモデルに沿ってデザインされていました。ただ、20 世紀最後の年ともなるとインターネットや E-mail がかなり普及し、ICT の技術進歩をいかに取り込んでいかに大きな関心が寄せられていました。当時は DG (Development Gateway) や GKP (Global Knowledge Partnership) など世銀が主導する他の ICT 関連のイニシアティブと競合する部分も多く、その後、世銀としても副総裁を中心に棲み分けに取り組むこととなります。この結果、2003 年ころまでには GDN の役割が「知識の創造」や「人材育成」に重点が置かれることになりました。

GDN の初期には WEB 上でのディスカッションなども含め、ネットワークの効果の高さには驚かされるものがありました。ただ、ここ数年、参加者が「常連化」するとともに GDN と ICT の関係はよく見えなくなっています。GDN に限らず、開発関係のメーリングリストなどでも一時は発言が盛り上がるがしばらくすると下火になるという現象がみられるようです。この「理論的な解明」は大きな課題だと思っていますが、GDN の性格を象徴する言葉だった“Scan Globally, Reinvent Locally” (スティグリッツ) の少なくとも Scan の部分は ICT の発達で、GDN のような特別な仕組みを経なくても簡単にできるようになってきていることが事実です。

さらにいうと、ICT 上のコミュニケーションは WEB (蜘蛛の巣) 型ですが、GDN は「ハブ・スポーク」型のネットワークです。この二つの異なったネットワーク

のあり方の違いがよく理解されておらず、これが GDN の発展のハードルになっています。WEB とそれを支援するハブ・スポークという棲み分けと連携の中で GDN の役割を再定義していくことが今後の GDN の役割強化になっていくものと思います。

---

その他:メンバー機関からの News 掲載

国際開発学会 第 19 回全国大会(2008 年度・広島修道大学)

イベント名:国際開発学会第 19 回全国大会

開催日:2008 年 11 月 22-23 日(土・日)

開催場所:広島修道大学

(広島修道大学(広島市安佐南区大塚)は広島市中心部から新交通システム(アストラムライン)で 40 分、終点の駅が大学正門前に位置します。

バス・タクシーならば市街地から 25 分程度です。車でお越しの方はキャンパス内の駐車場の余裕がございます。開催時期のキャンパスはまだ紅葉に染まっていると思います。この機会に是非お越しください。

詳細は、国際開発学会HPをご覧ください。(http://jasid.shudo-u.ac.jp/)

編集局あとがき

如何でしたでしょうか。次回、第 2 号は 8 月中の配信を予定しております。GDN の活動について広く御理解を得るべく、分かり易さを旨として配信して参りたいと思います。次号の「GDN と私」では、GDN-Japan 代表理事である近藤先生 ICU 上級准教授に御登場頂く予定です。

皆様の御意見頂きましてより良くしていきたいと思っておりますので、当該 GDN-Japan ニュースレターへのご質問やご意見などを gdn-japan@jbic.go.jp まで是非お寄せ下さい。